
変態万歳

三沢 馬太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

変態万歳

【Nコード】

N0712R

【作者名】

三沢 馬太郎

【あらすじ】

風呂場でスリッパを履く野郎VS俺の死闘（笑）。その結末に待ち受けるものは……

「もうガマンできねえ……」

おれはプラスチックの風呂桶を白いタイル床に叩きつける。カコーン！ 乾いた音が浴室内に響いた。そして湯気の中をズンズン進み、“プリプリケツ郎”の後ろに立った。

「おいっ、ケンポ、やめろやあ」おれの脇で頭を洗っていた毒島篤郎、通称“ポイズン”がシャンプーだらけの頭のまま、おれの腕をつかんだ。

「ウッセ、止めんな、ポイズン」おれはポイズンの腕を振りほどき、“プリプリケツ郎”、いや、“スリッパ野郎”と言った仇名のほうで知られてる、三〇二号室の学生の二の腕をつかむと、風呂イスから引きずり下ろした。「おいっ、お前、どんだけの積もりだっ！？アッ！？」

入浴していた他の住人たちは、一斉にこちらを注視する。

「……っ、ってえヨ！」スリッパ野郎は体じゅう泡だらけのまま、いやいやするように腰をひねった。「なんじゃ、いったい！」奴のたわわな尻がプリンと弾け、体中塗りとくられていたボディソープでおれの手はすべった。

「そのスリッパだ！ 手前どうしていつも、風呂場にスリッパ履いて来やがるんだ」おれは奴の足元を指さす。「潔癖症か！？ アア！？ そんなに風呂場の床が汚くてイヤなら、こんな寮に住まねえで独りでアパート借りやがれ！ それも、脱衣所で新しく履き替えるならまだしも、外を歩き回ってるスリッパでそのままズカズカ入り込んできやがって！」

「……た、たしかに」いつの間にかポイズンもおれの後ろに立ち、援護する。「えっ！ 分がってんのか、じぶん！ しかも、みんなが足拭く清潔な脱衣所のマットでも、念入りにスリッパの裏をゴシゴシ拭くちゅんは、どういうこっちゃ」

今述べた“スリッパ野郎”の奇行は、地方から東京の大学に入学し、晴れて大学の寮生活を始めたおれたち寮生の間で、GW明けくらいから噂になっていた。

“ケンポ”ことこのおれと、関西からやってきた“ポイズン”も、彼の不衛生な習慣を良く思わず、スリッパを履いた彼を風呂場で見ただ日には胸くそ悪く、いつも蔭で奴を罵倒していた。しかし今日はもうガマンがならず、おれは遂にキレた。

「フン、っそ、っそんなの…ぼくの自由じゃ」風呂場でもかけている黒ブチメガネの奥から、スリッパ野郎は厚ぼったい一重の目の奥の瞳をキョロキョロさせた。長い髪にむくんだ頬が不健康な印象を与える。しかし肉づきはいい肩をいからせ、奴は甲高い声を出した。

「え、ええんじゃ。これはええんじゃ。大きなお世話じゃ」

「なにイア!? どういう理屈や、こいつ!？」

「大事なもんじゃ。足を護るんじゃ」

「…ヒヒヒ、な、なんちゅう…こいつ、なんちゅうバカ? ワケ分からんのやけど? なあ? そう思わへん?」呆れ顔でおれと、周囲の他の学生を見回すポイズン。

「…フ…フ、フフ、フハハハ! あ、あんたらこそそうす汚いんじや、不潔なんじゃ。そんなに言うんだったら、自信あるんやったら、勝負でもするかいな? え?」相変わらずオドオドしつつも、辛うじて勇気を振り絞るかのように、スリッパ野郎はボディたわしを持つたまま意気込んだ。

「へえあ…」あまりの不敵さに、おれは一瞬、引きつった笑いを浮かべ、ポイズンを振り返り、ただただ叫んだ。感情の高まりのせいで、うまい言葉が出ない。「きいた? ね、ねえ、聞いた? 今の? なに、何々何!? 何なの、今の発言、何なのコイツ? え?

信じらんね。え? こ、この人、いったい、ナニ?」

「っていうか、っていうか…アホ? んだゴイヅア!?」ポイズンも激昂のあまり舌がもつれる。

「どうなんじゃ? え? どうなんじゃ? ぼくに勝ったら、もう

スリッパやめる。けど、もしぼくに負けたら、あんた…あんた、これからこの風呂場では、スリッパ履いてもらう、っての、どう？」

「っハ…！ バッカじゃねーの…？ 勝てると思ってんのか…？」

おれに…！」おれは信じられなかった。高校でサッカー部だったおれは、体力には大いに自信があった。まして相手はふかしイモのようなブヨブヨのヲタ野郎。こんな奴に負ける訳がねえ。「やってやろうじゃねえの！」

「お…おい、ケンポ、やめえや。アホらしいて、こんな奴の相手…」「いいって！ いいんだって！」

頭に血が昇っていたおれは、不本意ながら醜く歪んだ笑みを満面に浮かべ、余裕をカマす雄叫びをあげた。「おまえ、もう遅え…。クロスよ、ホント」

「ふん、…ふん…。いいよ、いいよ…ついでに言うと、ボクの指定するスリッパでってことで…」スリッパ野郎はガニマタで立ち、心なしかオタオタし始めた。「フ、フン…了解ってことで、いいのね…？」

「手前みてえなサイコブタに、おれが負ける訳ねーっつーの！ 約束してやるよ！」

「フン…ど、どうかな…それはどうかな」

「強がってんじゃねえっての…」言うが早い、おれは奴の柔らかな腹にケリを入れていた。

はふアッ！！ そう叫ぶと、奴は大きなタイル貼りのバスタブに背中から落ちた。大きな水しぶきがあがる。

「ごルあ、立で、ごッルあああ！」おれも共同バスタブに飛び込み、ジャブジャブ歩み寄るとスリッパ野郎の喉もとに手を伸ばした。

不意に頬と耳に強烈な打撃を感じ、いでえーっ！ おれは湯の中に手をつく。頬が焼けるようにヒリヒリし、強烈な耳鳴りがする。スリッパ野郎の濡れタオルがおれの側頭部を急襲したのだ。

「っ…、っ…、っこんの野っ郎ー！」立ち上がりとするスリッパ野郎のプリプリした腹に組みかかる。しかしボディソープまみれだ

った奴の身体全体はヌルヌルぬめり、まさにつかみどころがない。「つんふ」「ふんぬ」「ああ」「がんず」その後、しばらくバスタブ内で滑り、無様にコケ、絡み合い、裸の男二人の醜い「決闘」は続いた。次第に切れる互いの息。

やがて、これでっつ！　ひととき高い雄叫びが響きわたると、スリッパ野郎の右腕がおれの股間に伸びてきた。

「な。だめっ！？　やめっっ！？」隙を衝かれた。慌てて腰を引いたが遅く、奴の掌はおれの垂れるサオを力強く包むと、がっちり固定していた。

「だから、放せ、これ、いい加減……」悶えるも、急所を押さえられてどうしようもなくのたくるばかりのおれを嘲るように、スリッパ野郎は、こんなもんじゃいー！　ひと声叫ぶと、サオを握る右手をグイ、思い切り引いた。

おれの叫びが浴室全体にこだまする。ポイズンが目と口をあんぐり開けているのが見えた。おれは腰を前に突き出す形で、無様に熱い湯の中、やつの足元に沈んだ。

数日間、おれは部屋から出られなかった。

その後、おれが奴から渡された色違いのスリッパを履き、初めて浴室に姿を現した時、奴はヒゲを剃る手を止め、優しく微笑んだ。

「やあ」

おれは耐えた。屈辱的だったが、耐えた。毎夜、奴が居る居ないに関わらず奴と同じスリッパを履き、奴と同じ変態的生活様式に倣わねばならなかったおれの心中は情けなさで満たされていた。皆の前で宣言した手前、奴が居なくても止める訳にはいかない。ポイズンも次第におれから離れ、他の学生と一緒に風呂に入るようになった。そんなポイズンの背中を恨めしげに眺めて涙するおれの裸の肩に手をかけ、スリッパ野郎はそっと耳元でささやく。「わかる 때가来るんじゃ、いつか……」

奇病が世界に蔓延しているというニュースが流れ始めてから、日本、東京そしてこの寮の人間がその奇病に襲われるまでさして時間はかからなかった。

晩春にマレーシアで発生した皮膚病の一種、偽黄色ブドウ球菌型壊死性筋膜炎の病原菌、「変性A群溶連菌 βサラワク型」は東南アジアそして広東省に勢力を拡大し台湾、沖縄と北上した後、あっという間に日本全土を覆った。

白癬菌をもった表皮角質、すなわちもともと足などに水虫をもった人の患部から侵入した「変性A群溶連菌」は最初、「蜂巣炎」と呼ばれる、皮膚を赤く腫れ上がらせて強い炎症を起こす疾患と同一の症状を見せるが、実は「壊死性筋膜炎」という、より恐ろしい病気の原因菌であり、やがて真皮下まで冒された患者の皮膚はその後多量の出血や膿を伴って赤黒く変化し、遂には壊死する。それだけならまだよく、今回の新型変異種の場合、神経疾患や四十度を超える高熱・吐き気、更には精神障害を引き起こし、死に至るケースが多いというのも特徴だった。

症状が比較的軽い蜂巣炎の病原菌である黄色ブドウ球菌に、発症直後は菌の形状が似ていたことも、各国政府及びWHOの対応が遅れた原因でもある。

水上生活者が多かったり、井戸や炊事場を共同で使用するなど、湿潤な気候で、水を媒介とした生活様式を持つアジア地域に多く見られ、温泉や畳の生活を基本とする日本も当然アジアの一部であり、蔓延は当然のことと言えた。

まして、寮や共同施設の住人、その他スポーツクラブ等公共施設の利用者などの間には、水虫をはじめとする何らかの、ちょっとした皮膚性の疾患等を媒介として爆発的に広まり、季節が梅雨から夏にかけてというタイミングの悪さも手伝って、大量の死者を出した。おれたちの寮も例外ではなく、政府の警告が出た頃には時既に遅く、風呂場を通じてほぼ全員が感染し終わっていた。

真夏のうだるような暑さの中、おれはいつものように、奴のくれたスリッパを履き寮の廊下を、風呂場に向かっていった。セミには感染しないらしく、彼らは相変わらずかしましい。

入居者がほとんど居なくなり、管理人さえも死亡した今、がらんと静まった寮の廊下。ポイズンも二週間前に死んだ。比較的症状が軽く生き残った学生たちは、この暑気の中、高熱にうなされ、血膿だらけの布団の中うんうん唸っており、時折脳までもやられた学生の意味不明の叫びも聞えてくる。ゴースト・タウンというより、前線の野戦病院さながらだ。

おれは足取りも軽く、脱衣所の引き戸を開けると、そのままスリッパで浴室までズカズカ踏み込む。

気楽な口笛の音が聞えてくる。大きなバスタブの中、たった一人、あの“スリッパ野郎”が悠々と湯につかっている影が、白い湯気越しに見えた。

奴のくれたスリッパは「特殊な繊維」で編まれているらしく、あの恐ろしい菌に対して絶大な予防効果を持っていた。科学的な解明は後に譲るとして、とにかくあのスリッパを履いて風呂に入っていたおれとスリッパ野郎だけは、感染を免れたのだ。

当初はこの病原菌を流したのが奴自身じゃないかとか、このスリッパはいったい何なんだとか、疑念はいくらでもあったが、考えるのに疲れた今ではどうでもよくなってしまっていた。

「よう」身体を簡単に流したおれは、湯気の向こう、気持ちよくボズ・スキヤッグスの「We're All Alone」を吹くスリッパ野郎に声をかけ、温かい湯につかる。

「よう、ブラザー」奴はおれの脇によってくると、プリプリと脂肉の付いた腕を伸ばし、肩を組んできた。「よかったじゃろ？」

「なにが？」やさしく微笑み、おれはわざととぼけてみせた。

「ぼくの言うこと、聞いって」肉のついた頬と、曇った黒ブチメガネがおれのすぐ目の前にある。「こういうもんなんじゃ、人の運命ちゅうのは…」

「…そうかな…」おれも奴と肩を組む。そうして、浴室の窓の外、真夏の青空を眺めやった。「こんなもんなんだろうな、人生なんて…」

「そうじゃ」満足気に微笑むと、奴も窓外に目をやった。そして呟いた。「きみとはこれからもうまくやってけそうじゃ」

「ああ…」おれも頷いた。

そうしたまま、二人しばらくバスタブにつきり、真夏の空を眺め続けていた。

（後書き）

2008年1月5日に書いた作品です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0712r/>

変態万歳

2011年2月20日21時55分発行